魔法少女と孵卵器（インキュベーター）

ダル神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女と孵卵器（インキュベーター）

【Ｎコード】
Ｎ００８６ＢＡ

【作者名】
ダル神

【あらすじ】
僕たちインキュベーターの末路を君たちに知ってほしい。
僕たちの報いを
僕たちの終わりへと続く物語を。
僕たちはそれだけの事を君たちにしてきてしまった。

押し付けて、押し殺してしまった。
だからみんな聞いてほしい。
お願いだから聞いてほしい。
罪滅ぼしなんてつもりはこれっぽっちもない。
こんな事で許して貰えるなんて考えていない。
ただ聞いてほしいだけなんだ。
僕たちは最後には結局狂ってしまう。
僕たちの狂ってしまった姿を君たちに見てもらいたい。
見て笑ってほしい。
嘲笑ってほしい。
ざまあみろ、とそんな風に思って貰えたならこれ以上嬉しいことなんてない。
間違っても情けなんてかけてはいけないよ。
かわいそうだなんて間違っても思ってはいけないよ。
僕たちはそんなものを受ける資格すらないんだからね。
ただ、自業自得だと。

それがお前たちが上位種だとかってに謳ってやってきたことだと、
そう思ってほしい。

今思えば上位種だなんて片腹痛いよ。滑稽だ。

そう、これは滑稽な物語なんだよ。

僕たちの喜劇のような滑稽な末路を見てほしい。

これはｐｉｘｉｖと重複連載です

プロローグ

僕たちインキュベーターの末路を君たちに知ってほしい。
僕たちの報いを
僕たちの終わりへと続く物語を。
僕たちはそれだけの事を君たちにしてきてしまった。
押し付けて、押し殺してしまった。
だからみんな聞いてほしい。
お願いだから聞いてほしい。
罪滅ぼしなんてつもりはこれっぽっちもない。
こんな事で許して貰えるなんて考えていない。
ただ聞いてほしいだけなんだ。
僕たちは最後には結局狂ってしまう。
僕たちの狂ってしまった姿を君たちに見てもらいたい。
見て笑ってほしい。
嘲笑ってほしい。

ざまあみろ、とそんな風に思って貰えたならこれ以上嬉しいことなんてない。

間違っても情けなんてかけてはいけないよ。

かわいそうだなんて間違っても思ってはいけないよ。

僕たちはそんなものを受ける資格すらないんだからね。

ただ、自業自得だと。

それがお前たちが上位種だとかってに謳ってやってきたことだと、そう思ってほしい。

今思えば上位種だなんて片腹痛いよ。滑稽だ。

そう、これは滑稽な物語なんだよ。

僕たちの喜劇のような滑稽な末路を見てほしい。

僕たちは一つの大きな存在から生まれる。

元は一つの大きな何かから生まれる。

それは、そうだな。君たちの言葉でいうと神と言った方がわかりやすいのかな？

もちろん君たちの考えている神様と同じなわけではないよ。

ましてや僕たちは神の使い、天使のようなものと言っているわけで

はない。断じてない。

ただ、漠然としない大きな何かから生まれると理解しといてくれたらそれでいいんだよ。

僕たちの存在なんてまあ、得体のしれない宇宙人とでも理解しといてくれたらいいさ。それ以上でも以下でもないさ。

少しややこしくなってしまったかな？

僕が言いたい事は、一つのものから生まれる僕達は記憶が共有されている、ということさ。今までの僕ではない祖先が何をやってきたのか。何を目的にして、何を任されてきたのか。

勿論生まれてしまえば個人としての自我を持っているから、僕達が常に記憶を共有しているわけではないのだけど。

生まれてきた時にはもう何をするかは、解りきっていて、そこには感情も感動もなかった。

ただ、漠然とした僕達の祖先がやってきた事をするだけなのだから。

だから僕達の祖先は切り捨てたのだろう。

いらないものだと。

そんなものは目的に至るのになんの必要もなく。ただ障害にしかならないと。

こうして僕達インキュベーターはただ無感情に、無感動に目的を遂

行する。

そんな僕達インキュベーターは宇宙の延命を任された。

僕達は戸惑った。いやどうだろう？僕達は感情がないのだから…ただ困った。とそう思っただけかもしれない。

そんなエネルギーの塊であり、渦であり、海であり、根源であるそれを。

僕達を、僕達の星を、銀河を生み出した宇宙の命を繋ぐなんていったいどれほどのエネルギーが必要なのだろうか。

そんなもの、一つの星で、銀河で生まれるエネルギーではとても追いつかない。一つの星から生まれるエネルギーはその星が生まれる為に必要としたエネルギーに比例しない。エネルギーが変換されるとそこには必ずロスができる。

僕達は研究した。しかしあまりいい結果はなかった。こうしている間にも宇宙のエネルギーは目減りしていく一方だ。

僕達は僕達の捕らわれているエネルギーではダメだと気づかされた。

それでは、もうダメだと。

とてもじゃないけど無理だ。

感情のない僕達にも気苦労はあるのさ。

諦めたくもなるさ。

道も思考も閉ざされた僕達は形を持たない何かならどうだろうかと考えた。

形もエネルギーとも認識されていないものならどうだろうか。

例えば、心だとか感情ならばどうだろうか。

僕達の中で、極少数ではあるけど、心を持っていたものがいた。それは研究においてはお荷物にしかならず、いわゆる精神疾患のようなものだと認識されていた。ただ、そんな疾患を抱えているものでも研究でよい発見をするものも少なくはなかった。そう、彼らには何かエネルギーのようなものを感じていた。

もっとも、あらゆるエネルギーを研究し、形あるものは全て研究した僕達は必然的に調べていない、唯一手をつけていないそれにたどり着かされたと言うべきなのかもしれない。

ダメ元で。

でもこれがダメだったら他に手のつけようがなくて。

だから僕達は念入りに調べた。

それはめまぐるしい発見どころではなかった。

僕達は驚愕した。

起こった出来事に目を疑った。だってこの星からみたら、こんな小さな一個体から、一つの感情から発するエネルギーが一つの星を凌

駕するほどのエネルギーが発生されたのだから。

だから僕達は探した。この銀河を、この宇宙を。

僕達の中にいる精神疾患のような稀薄な感情ではない、もっと強い感情をもつ生物を。

そしてたどり着いたのだ。

この星に。

後に地球と呼ばれる星に。

僕達はまたも驚かされた。

この星は僕達の祖先が非効率だと切り捨てた感情を、心を、ある一つの種族全てが持っていたのだ。

後に人間と呼ばれる彼らと僕達インキュベーターの出会いだった。

彼らの中で取り分け強い感情を抱いてるのは、第二次成長期前の少女であった。

さらに感情の中でも効率がいいのは希望から絶望への総転換。この時に生まれエネルギーは個人差はあれど一つの銀河が生まれるほどなのだ。

僕達の発明した感情からエネルギーに変換する装置にはある副作用があった。

それは感情を形にしてしまうことであった。

感情を形へ変換するに当たって生まれるエネルギーを僕達は採取する。

僕達はエネルギーがほしいのであって、別に感情を形にしたいなんていう美的感覚はない。そもそも感情がないのだから。

希望という感情を形に変換し生まれる結果はとても美しく優しい力。

しかし絶望という感情を形に変換し生まれる結果はとても惨い、酷い、力。

一見僕達からしたらあまり関係ないものに見えるが、しかし、人間が絶滅してしまっては、この宇宙のエネルギーが目減りし、最終的にはなくなってしまう。

絶望から生まれるエネルギーは確かに莫大ではあるだけに、その力もまた強大なのだ。

そこで僕達はあるサイクルを考えた。

希望から得られる感情エネルギーをその人間の願いに使おう。その希望はより強固なものとなり、強い力を生み出すだろう。その力で、絶望の力を打ち倒してもらおう。

希望の力は絶望へと変わる日が必ずくるだろう。

ならば、また別の希望に打ち倒してもらおう。

そんなサイクルを僕達は作った。絶望から生まれた力の存在を僕達は魔女とよんだ。

魔女になる少女を僕達は魔法少女とよんだ。

希望が必ず絶望にかわるように

魔法少女もまた魔女になる。

僕達はそんなサイクルをつくりだした。

作ってしまった。

それから、僕たちは多くの少女と契約した。

僕たちと契約したことで人間の文化は急速に成長した。そして、多くの人間が死んだ。

僕たちと契約して幸せになった者なんて一人もいなかった。

みんな初めはいつだって笑顔で最後は必ず泣いていた。

希望の叶ってしまった彼女らは最後は絶望しか残らなかった。

そんな歴史を僕たちは歩み、作ってしまった。

これが僕の継続した記憶。

僕が生まれるに当たって最初からある情報。

僕は自分という存在を理解した。

そう、僕は彼らのいう精神疾患を抱えた出来損ないであるということだ。

感情をもってしまっている出来損ないのインキュベーターなのだ。

プロローグ（後書き）

僕の拙い文章を最後まで読んでいただき本当にありがとうございました。前書いたＳＳでマミさんが全く出せなかったので今度こそ彼女を幸せになってもらえるよう全身全霊を以てのぞみたいです。コメント、感想もらえたら最高に嬉しいです。評価のほうも楽しみにしております。どうかよろしくお願いします。

第一話　巴マミ～（前書き）

このキュウべぇには精神疾患として感情があります。キャラ崩壊はあらかじめご了承ください。

第一話　巴マミ~

ねぇ、マミ。君は覚えいるかい？

覚えているわけないよね。

僕達に関する全ての記憶がない君達は覚えているわけないよね。

でも、僕は忘れないよ。ずっと忘れないよ。君と出会ったあの日を。君と過ごしたあの日々を。僕が不覚にも幸せだと感じてしまったあの日々を。僕達のしてきた事は後悔しかなかったけど、それでも、君と出会えた事だけは後悔なんてなかったよ。

それは交通事故というものだった。人間の作った乗り物、いわゆる車が何らかの原因により不足の事態に陥る事である。それは軽い物損事故から重い人身事故まで様々な要因があり、原因がある。

その事故は比較的大規模な事故だった。

勿論災害被害に比べたら大したことはないが、自動車事故としては大規模な事故だった。

高速道路で民間の車と大きなトラックとの正面衝突。それに連なり多くの車が衝突する。おそらく生きているものはいない。誰が見てもそう思うだろう。しかし、僕はこの大惨事の中奇跡的に生き残っている少女がいる事を知っている。それが、僕がこんな所にいる理由。

そこに巴マミがいたからだ。

巴マミの姿はとても痛々しかった。とても酷かった。

身体の下半身は車に挟まれてペシャンコになっていた。上半身の下部では内臓がこぼれ出ていた。彼女はもう何が起きているか理解できていないだろう。痛みなんて感じる余地もないだろう。息ができる事が不思議なくらいだ。いや、彼女の異常のような過呼吸を聞く限りもうその呼吸も時期止まるのだろう。

僕は今からこの娘に何をしようとしているのだろう。何をさせようとしているのだろう。君はきっといつかこういうだろう。何故あの時死なせてくれなかったのか、と。そうなる事がわかっていても君に生きてほしいと思ってしまうのは僕ができそこないのインキュベーターだからだろうか。

「僕と契約して魔法少女になるかい？そうすれば君は生きる事はできるだろう。でも、それはとても辛い事だよ。生きるのがいやになるくらい辛い事だよ。それでも君は僕と契約するかい？必ず後悔する日がくるとわかった上でそれでも僕と契約するかい？」

彼女はかすれる声で、荒い呼吸の中こう言った

「……た…すけ…て……」

これが僕の生まれて初めての契約だった。巴マミの魂に僕は触れる。彼女の魂を願いにのせてソウルジェムを作る。彼女の感情エネルギーによって願いが成就させる。終わらせる。終わらせてしまった。

彼女の人生を終わらせてしまった。

彼女の身体は完璧に復元される。傷一つなく。服までももとあったであろう姿に復元される。それは、この光景にはあまりに不自然で、歪で、異常だった。

巴マミは気絶してしまっている。死んでしまっているように眠っている。僕はそんな彼女に話しかける。

「君はよく意味も解らずに契約しただろう。真実を隠されているのだから当然だ。もしかしたら君は助けられたと勘違いをしてしまったかもしれない。僕の事を良い奴だと思ってしまったかもしれない。でも、それはどうしようもない勘違いに他ならないよ。

僕はね君にひどい事をさせようとしているんだよ。君を不幸にしようとしている。僕と契約すれば確かに君の命は助かるだろう。でも、いつかきっと後悔する日がくるだろう。だから一つだけ約束してくれ、君が真実を知りそれを受け入れる事ができなくて世界を呪いたくなったらまず僕を呪ってくれ、僕にその呪い全てをぶつけてくれ。」

僕の声はガソリンに引火して燃え盛る炎のなか悲しく響いた。

第一話　巴マミ～（後書き）

感想、コメントどうかよろしくお願いします。評価の方も楽しめにしています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0086ba/

魔法少女と孵卵器（インキュベーター）

2012年1月4日03時45分発行